

---

# スタ バン

伊東ゆさ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

スタバン

### 【Zコード】

N1755D

### 【作者名】

伊東ゆさ

### 【あらすじ】

リストカッターの加藤由比。平凡な日常を送る増岡竜平。母親から虐待を受けている長谷川孝。心臓の病を持っている吉岡恵。4人のバンド生活を描いたシリアルスカフギャグ青春コメディー時々恋愛？！的な物語。

## ボーカリスト、加藤由比の話

(飛行機雲みたいだね)

赤い血が連想させた。

飛行機雲のよつにつつ。と細い線を描いている様子は由比にはきれいに見えた。

他人から見たらきっと異常行為なのだろうけど。

由比がリストカットしている理由は、死にたいという気持ちからではない。

ただ、うまれてきてござめんなさい。そういう気持ちからのものであつた。

自分の存在はただ、この世界には不要なもので。

作られた骨や血や肉や脳などは、すべて自分にはいらないものだ。

(返すよ、空に)

・

今日はまだきつていらない左手首を支えにして立ち上がり、飛行機雲のような血が流れている右腕を空に見せるように上げる。

果たしてこの体が何かに役立つことがあるのだろうか。

実現しそうにない妄想にくすりと笑った。

「馬鹿みたいだね」

next

始まりはじまり。

## ギタリスト、増岡竜平の話

平凡です。

はい、平凡ですよーつだ。

つてゆうか。

特別な日常を送ってる子なんか、いますか！？

みんな、平凡が一番だなんて言ひけれど、

俺はそうは思わない。

人間、一度はかつこいいと思われたい。  
人間、一度はものすごい恋愛してみたい。  
人間、一度は人を感動させてみたい。

そうでしょう！？

「ねえ！佐藤先生！！！？」

「おー。 そうか。 増岡。 お前は一度はテストで80点以上いって先生を感じさせてくれないか」

くそうーやはり先生に俺のアイデンティティーはわかつてもらえないんだな。

あ、どうも。増岡竜平です。

ごく普通の、男子中学生です。

まあこじ変わってるといえば僕の髪の色、おばあちゃんが外人。

それくらいです。

ちなみに髪の色はオレンジだけど、目の色は黒。

僕は大変中途半端なDNAを受け継いだらしく、父さんのように

までオレンジではない。

つて俺誰に説明してるんだろ？

ああ先生が睨んでる。

「よし、増岡。お罰としてあの赤いギター持ち帰ってくれないか。

先生アレ邪魔でしようがないんだ」

持ち帰るだなんて、そんな、拷問だ！

「というか、増岡。学校には不要物は持ち込み禁止なんだ」

「不要物じゃありません！アレは俺の魂なんですうう！！！」

ぎろり。

うあ。

「持ち帰れ」

「…あー」

そんなこんなで、だ。

なんという教師だろう！

生徒の趣味を極限まで伸ばし、それを活性化し、生徒のいといじりにすべきなのではなかろつか？

昼休み、一人とひとつで屋上に向かう増岡竜平、今日の話題…。

ははは。

持ち帰る前にもつかいだけ、野外練習だ。

もちろん、あとで先生に許しをもらつてまたもつてくるけどね。

俺はあきらめないのだよ、佐藤センセ。

扉の前まで来て鍵がないことに気がつく。

しまつた！校内鍵マスターの海棠君にもらつたのを忘れていた！

なんと言ひミス！

どうしようつか。あきらめるか？

なんてね…ナンセンス…」ことであきらめる増岡頗ではないのです。

こんなときこそ女子からもらつたヘアピンで「やれこまよ。

はははは。増岡竜平、初のピッキング。

いざ、挿入！！

鍵穴にヘアピンをいれ、適当にかき回す。

つて、こんなんであくわけないでしょ。

「へやう

あきらめるしかないのである。

ため息をつき、ドアノブに手をかけ立ち上がる。

がちや。

あれつ？成功、したの？！

扉が開く感触がした。

悪いことをした、という罪悪感より、成功したという喜びのほうが大きかつた。

重い扉をぐつと押す。

ぶわっと風が増岡に向かって吹いた。

(い、田代ミシ…！)

必死で目をこする。

だがいたみは増すばかりだ。

(あ、そういえば…いつときつて涙を流せばいいんだったつけ?)

ぱっと目を開く。

涙で視界がぼやけた。

それを学ランの袖で拭う。

視界がはっきりとした。

(なつ…)

その瞬間、奇妙な光景が増岡の視界に入った。

セーラー服を着た少女が仰向けに寝ているのだ。

ああ、人がいたのか、そういう思いもあり驚いたがもつと驚いたのは、

その少女が手首を切っていたことだった。

(あ、ああいつのつて、なんていうんだっけ?)

最近深夜のテレビ報道でやつていたのを思い出す。  
確か、

(リスト、カット…?)

自殺願望者。

あの少女は自殺願望者なのだ。

(う、そ…！)

自分とはあまりにも次元が違うため、吐き気がした。  
もしかしたら彼女はいま、自殺しようとしているんじゃないだろうか。

増岡は息を呑んだ。

止めたほうがいい、良心がそう告げた。

(やうだよな…ぜ、絶対、止めたほうがいいよな…)

増岡はぐっと両手を握り、彼女へ近づいた。

「あ、」

声をかけようとしたとき、少女が息を吸う音がした。

「すうっ…」

増岡の足が止まった。

少女が突然歌いだしたのだ。

「

」

(あーり……)

歌詞は英文でよくわからない。  
でも、とにかくわかるのは、

(きれい)

澄んだ声。

はつやうじしていて、心臓まで届く。

そうか、この「はさみ」と人を感動させることができる子なんだ。  
俺の目標としたことを、「このこはしさなこうちにしてるんだ。  
すいこーすいこー！」

「すみませんー!俺と一緒にバンドやつませんか!」

「めん、口が渦つました。

## 幼馴染？

前回、増岡竜平、口が滑りました。

「は？」

「…………」

視線が痛い。

「ごめんなさい。」

快樂の時間を邪魔して「ごめんなさい」。

決してあなたの邪魔をしようと思つたわけではありません。

ええ、そうですとも。

勝手に出た声が悪いです。

ええ、ほんと。

「リストカットって痛くない？」

「ああ、またやつてもーた。」

「どんな質問だよ。」

「……べつに。すつと切るだけだし」

君もそう簡単に答えるんじゃありません。

女の手はすっと体を起した。

不健康そうな体だ。

全体的に細くて、まっしろ。

白いアスパラみたい。

「わっかの、バンドとか、何？」

え、

ああ。わっか俺そんなこと口走ったんだっけ？

おおう、わっかいつたことも忘れるなんて俺の脳もやれやれパーク  
かな？

「実は、」

待て。

君の声がきれいだったから、なんて言つたら告白みたいだろ……！

馬鹿馬鹿！アホ！まだ会つたばっかなのに！

つてゆづかこの」、よく見るとすげー整つた顔してんな。

目はきらきらしてておつきくて睫毛で影ができるくらい長い。

つて何考えてんだ……！

俺は下心があつてこのことを誘うわけじゃないよ？！

声一聲に惚れたから……！

「実は、俺バンド部田指してて……」

なんて言い訳をだしてみる。

どうだ、食いつくか？！

「…ふうん。何で今頃？」

「え、あの、わかんないけど……」

といったの言訳に理由なんてありません。

理由を考えてみる。

うーん、えーっと、なんででしょ…。

なんて考へてゐるあいだ、いつの間にか彼女の顔が田の前に。

う、うおお…！

もじゅ彼女もその氣に…！

「ねえ、」

「まほまほまほ…！」

「君、俺と会つたことあるよね？」

え、それなんて逆ナン？

会つたことなんてありませんでしょ。いや、でも同じ学校なんだから一度は…。

「小ちい頃だよ。思ひ出せない？」

疑問系じやなくて確定？

会つたこと、ねえ。

「君、増岡だよね？」

はい、そうですね。

「昔よく、遊んだじさん。』おかつて呼んでたじさん。』

え、

おか?

なんか呼ばれてたよ'うな気が…。

俺って記憶力ないからなあ。

そんな小さこ頃のこと覚えてない。

『泣いてんじゃねーよ、くそばかおか』

あれ。

な、なんか変な記憶が…。

昔よく遊んでたのといえぱ…。

ゆい、めぐみ、たか。

あ。

「ゆ、い?」

「やひ、あたり」

ふわりと、由比が笑った。

思い出した。

昔つから男っぽかった美少女。

いつも俺が泣かされてるとき俺を殴つてた、由比。

それと、あんまり笑わなかつたたか。

あと、あんまし遊べなかつたけど病弱そなめぐみ。

いつの間にか遊ばなくなつて、それで、おんなじ小学校通つてたけどみんな違うクラスになつちゃつて、それからもう話してない。顔、忘れちゃつてたよー。

「で、やつせのだけビ。」

「へ、うそ」

「やつうか

わいわいとした笑顔が綺麗で由比は俺を見ていた。

いきなりの展開のはやさこつけない。  
けれど、

これからが楽しみだ。

## 口頭発表（演説会）

よりこ下ネタ。

あれ以来、俺と加藤は俺と飯を共にする仲になつた。

「お前加藤由比とどんな関係なんだよー?」  
(元)

「お前が、幼馴染つすよ。  
どんなりて、幼馴染つすよ。  
いやあね。」

「あの学年トップと学年ほぼ最下位のお前が一緒にいる」となんか  
地球が割れてもあつちやこけないとなんだぞ?」「

は、学年トップ?

マジですか?!

「つて聞いたんだだけだ」

「そんなことより部員集めだら、バンドだったらボーカルとギター  
とドラムとベース。ほら、でもやつたやつお前の仲間にいる?」

無視ですか。  
そーですか。

いーもんいーもん。  
あとで先生にきいてやる。

「まわりにはいないよ  
「友達いないの?」

「ノヤロウ。

「こりよ、たくさんいるよ。もうすれ違った人が全員友達だよ  
「そりやすげえ」

もうこの人やだ。

「俺とお前はなんなの?」

なんなのって何が。

「お前はギター?俺は?」

「その俺って言うのやめない?  
「やだ。俺は何?」

こいつを女としてみないことをここに宣言した。  
かわいくなーいかわいくなーい。

「おここら、答えるや

「ボーカルがいいお前は。  
「日本語変。」

クオーターですから。  
つて関係ねえ。

「俺つて歌うまいの」

疑問系で聞けよ。

「うまいよ」

「ふうん」

あれ、もしかして照れでます?  
あら、やだ。

前言撤回してやりともいいよ。  
結構かわいいといひあんじやん。  
このこも人の子！  
思わず頭をなでてやりたくなる。

「前から気になつてたんだけどさ、」  
「なあに?」

思わず猫なで声で答えてしまった。

由比の田が気持ち悪いものを見るような田になつた。  
ごめんよ。

でもすぐ普通の顔に戻りさつきの質問を続けた。

「その髪地毛なの」

「あれ、ちーれこいろいわなかつたっけ?」

由比のしゃべり方がだんだん気になつてきた。

なんだ、その日本語を覚えた原始人みたいなしゃべり方は。

氷になる

疑問系を疑問系で聞いてこないのも復はない  
でも、やじやない。

どちらかといつと女也。

「いやあ、

なんだ、次はどんな質問だ。

「チン毛もオレンジなの」

驚愕の一言。

しかもかわいらしく小首を傾げやがつた。（兵器だ）

思わず口を開いてしまつた。

とんどり血が髪は集まるべくかたわらる  
毛のすごい体温の俺！

つて俺の髪はオレンジ、おれんだ。

「おおお、女の子がそんな」と聞くなりおおおつづつ……。「氣になるもの」

つて、二の二！

俺のベルトに手えかけやがつた。

「あーっあーっ……なにかね……せめが——。」

「教えてくれないなりじりべる。」

「うふ、ああ、……………」

その日、俺の叫び声は全校生徒に聞かれてしまったらしい。  
先生が急いで屋上に来てくれたけど、遅い。  
もう見られてしまった。

泣きながらベルトを締めていると、40過ぎの堵陀先生に汚らわしいと言われてしまつたし、なにしてたんだ、と担任の佐藤先生に呆れ顔で見つめられた。

屈辱だ。

由比は普通の顔で俺を見つめていた。  
このヤロウ。

ああ、このせりふは今日一回目だ。

「オレンジ  
「つづつづ  
「

まだ言つか。

next

## ケーオンフ

バンド部のお許しをもらつため、俺たちは放課後学年主任の丸田先生（女性）に相談した。

「バンド部へやりたいです」

「え？ 軽音部のこと？」

「NO! バンド！」

軽音よりかっこいいんだぞ。  
まいっただか。

…違ひがわからぬけど。

まあ、バンド部のほうがかっこいい感じするじやん。

「うーん…。ケーオン部ってあつた氣がするんだけどなあ…。あ、  
橋本センセー、部活表ありますかあ？」

ああ、ありますよ、そう言つて橋本先生は丸やんに部活表を笑顔で  
わたした。

「加藤さん、部活するの？」

橋本先生が加藤に向かつて話しかける。  
すると加藤は俺の学ランの裾を掴んで俺の後ろに隠れた。  
なんだこいつ。小動物かなにかか。

橋本先生はすこし残念そうな顔をして自席に戻った。

人見知りなのか？

とりあえず俺は加藤の頭をぽんとたたいた。  
たたくつてゆうか、まあ、なでたつもり。

「はい、増岡くん、加藤さん、部活表」

丸やんがゆつたりした口調と動きで部活表を渡してくれた。

「さんわづ」

「どおいたしまし！」

部活表を受け取った俺と加藤はとりあえず屋上へ向かった。  
最近10分休みも屋上に来る。  
つてそんなはなしはどうでもいいんだけど。

「うわ、うひの学校つてこんなに部活多かつたんだ」  
加藤が俺のすぐ隣に来た。  
近いよ。

「あるかな、ケーオン」

「おでんクラブなら見つけた」

「そんなクラブ見つけなくてもよし」

並び順が適当すぎるけど、あるかわからない。  
不親切な部活表だ。

「あ」

突然加藤が声を出だした。

「何？」

「ギターの音がする」

え？

「きこえな、ぶつ」

加藤に口を無理やり塞がれた。

静かにしろってこと？

口で言つてくれればいいじゃん。

それがいやなら人差し指を口にやつてシーとかね。  
鼻まで塞がないでよ、息できない。

「聞こえるでしょ」

よくわからぬけど、とつあえず耳を清ませてみた。

「あ」

うん、聞こえたよ、加藤。

すごいな、こんな最小の音が聞こえるなんて。

そのギター テクは、とても上手とは言えないけれど、下手でもない。  
でもなんか、わかんないけど、

すげえ。

インパクトがあつたわけでもないのに何故かすごいと思つてしまつ

た。

とりあえず加藤さん、手をとつて俺を解放して。  
とりあえず加藤の手をたたく。

「あ、めん！」  
めんじってお前。  
もつと言つて方あるでしょ！」

加藤は俺を解放してから、部活表を手に取つた。

「ねえ、あつたよ  
「そりや、どつかでギターがなつてりやあるでしょ」

加藤に部活表を渡され、文字の場所に指を指された。  
由比が指した場所を見ると、そこには

『Key 音部・たなか わとも』

と手書きで書かれていた。

誰がつけたかわからんが、

どんなネーミングセンスだ。

「多分、この田中センパイだと想ひつよ」

「そうだね、俺もそう想ひつよ。  
とりあえず、それを聞いてこいつへこいで」と、

入部をせてもうらおーか

「…『ついでに』なの」

next

## 入部！

とつあえず、やつきの部活表を返して入部届けをもらつことにした。

丸やんはうれしそうに笑つて俺と加藤に入部届けを渡してくれた。

「あー、嬉しいなあ。加藤さん、やつとこうこう行事参加してくれるようになつたんだねえ」

加藤はまたさつきみたいに俺の後ろに隠れた。

隠れたりて無駄だつて。何がしたいのここのこは。

先生はその様子を見てくすりと笑つた。

「それこそ、」

丸やんの手がふわりと加藤の前髪に触れる。

「最近、まつすぐ前を見ているね。増岡くんのお陰かなあ

丸やんの手が移動して次は俺の頭をなでた。  
そして小声で俺に話しかけた。

「感情表現ができない不器用な子だけど、これからもよろしくね。

君が、光になつてあげて？」

入部届けを受け取り、Key 音部の部室を聞いてみたのだが、どうやらひとつずつ教室を使えないらしいへ、どこかへ移動しながらの部活動なんだそうだ。

とりあえず、音のするほうにあると考へ、加藤の指示に従つて移動しようと決めた。

えーっと、あれだ。  
丸やんと加藤は親子か何かなんだろうか。（まあ、年齢的にありえないが）

随分、加藤の事情を知つてそんな口ぶりだったが。  
つとゆうか、光とはなんなんだろう。  
力になつてあげて、そういう意味だろ？  
なれるだろ？  
なれるだらうか、加藤の光に。  
俺はそれを聞いてどう思ったのか？

そりゃあ、

なれるなら、なつてやりたい

と、思つ。

（…ん？）

なな、何だこの展開は。

俺が加藤スキー フラグが立つてるじゃないか。  
そんなことは、断じてないつ。

俺が好きなのはもつと純粹でかわいらしい子。  
こんな下ネタを言うような奴じゃないのだ。  
しかも、こいつ俺の下の毛を見たわけだし…。

「ねえ

気がつくと田の前に加藤の顔があつて驚いた。

「顔あかいよ」

ええ、そうでしょうとも。

「音、ここから聞こえるよ」

加藤がとある教室の前で立ち止まつた。

教室名が書いてあるプレートをふと見上げると、そこにには「Key  
音部部室」と書いてある紙が張られていた。

だが本当の教室名は理科準備室である。  
勝手に張っちゃダメでしょ。

「入るの」

「入るでしょ」

扉にてをかける。

ガラリ。

開いた瞬間何故か目の前が真っ暗に。

「…何」

うえのほうから声がして頭を上げてみる。

視界に映つたのは橢円形のめがねをかけた身長170くらいの男だ  
った。

俺が知つてゐる一年生にこんな人はいなかつたので勝手に3年生と認

定する。

ふと、また加藤の手が俺の学ランをつかんでいるのに気づいた。  
またですか。

今日は3回目だぞ。

なんて、そんなことは置いといで。

とりあえず田を合わせて数十秒。  
メガネ先輩（？）はくるりと後ろを振り返って誰かに話しかけた。

「なんか、いるよ

なんかとは何だ。

失礼な人だな。

さつきまでギターを弾いてたのはこの人だと思う。  
手にピックが握られているから。  
加藤の手が俺の学ランから離れた。

「あ、んたですか。さつきのギター」

おお、こいつしゃべった。

なんて当たり前なんですけどね。

「…ああ。ギターね。俺だけど」

「…そう」

「…なんか、用？」

こいつら似てるような気がする。  
気のせいいか?

「言わないの」

え、あ、そーか。

入部、しにきたんだつけか。

「あの、Key 音部つてだれがつけたなんですか」

あ、間違つた。

加藤が俺の脚をふんづててます。

ごめん、ボケたわけじゃないんだ。

気になつてんです。

するとメガネ先輩の後ろから妙にテンションが高そうな人が出てきた。

その人もメガネだった。

「あーっ、それ、俺俺つ」

高そうじやなくて高かつた。

「名前は俺じやねーけど、君ら、入部希望かな?」

「あ、はい。そです」

そういうと後ろのメガネの人は二コ一つと笑つて俺の肩をたたいた。

「そか、そか!はいんなさいつ」

あつさり、入部。

なんだ、つまらん。

まあ、これからが楽しければいいか。

ここもこるしね。

next

## 部員紹介

「はい！じゃ、祝 部員4人！というわけで、自己紹介しようか…」

しばし沈黙。

え、だだ、だれかしゃべれよ。

つていうか言いだしつべのあんたが先に言えよ。

ふと、隣に座っていた加藤が立ち上がった。

「加藤由比。2年B組。ボーカル希望」

なんだ、今日のお前はなんだか積極的だな。

加藤が俺をじろりと睨んでいる。

え、なに、自己紹介しようと？

「あー…。増岡竜平です。ギター希望」

軽い、ほんとに軽い自己紹介だな。

「はあいつ！わかりましたあー。じゃあ3年生の紹介するね。俺の名前は高橋優堵<sup>たかはし ゆうと</sup>ピアノ。今はこいつと組んでますつ。」

その高橋セントパイは無理やり隣に座っていた先輩を引っ張った。

「まひ、自己紹介つ

メガネ先輩はしばし無言で俺と由比を見つめ、目をそらした。

なんなんだ。

「たなか。田んぼに菜つ葉の歌つて書いて、田菜歌

ひろむ  
拡

間違えないでね、田菜歌先輩はそういうとその場から移動して自分のギターをいじり始めた。

こんな、変な先輩に恵まれて俺は大変、たいへん、幸福、なのか、不幸なのか。

「あ、そうそう。君らね。バンド、何人結成なの?ギター、ボーカルだけじゃあ足りないでしょ」

「え?」

「ああ。そうだよな。  
俺ら二人じや、もの足りないよな。」

あといるのは、二人くらい?

ベースとドラム。

そんなことを考えていると、由比が小声で俺に話しかけてきた。

「…たかと、めぐみ」

あー。そっか。俺、由比ときたらその二人だよねー。  
覚えてないけど。

「…」の学校にいたつけ?」

「…いるよ

じゃあ、勧誘といつときますか。

「明日、探そ。」

由比は「ぐりと頷いた。

n  
e  
x  
t

## ドラムリスト 長谷川孝の話

小さい頃は幸福だった。

優しい父親、毎日遊ぶ友人。

その幸福もずっととは続かなかつた。

母が父さんを振つたのだ。

『あなたみたいな負け犬、もう付き合つてられないわ。孝まで負け犬にしないで頂戴。』

俺は母親を恨んだ。

『母さんなんて大嫌いだ！！！！！』

本当のことを叫んだ。

そのとき、初めて殴られたのだ。

最初は普通の母親のように頬をはたくだけだった。  
それがだんだんエスカレートしていつて、蹴られ、切られ、最終的にはタバコで肌を焼かれるというレベルまで。

あのときの母さんは異常だった。

正直な話、今もだが。

そして中学に入学して、虐待はぱたりとやんだ。

「小さいときだめだつた分、中学で挽回しなさい。やつしたら許してあげるわ」

何を許すのか。  
意味がわからない。

「一位をとりなさい。あんな低レベルの中学で取れて当然でしょう？」

じゃあどうしてこんな中学にいたのか。

「友達なんかつくれちゃだめよ。そんなもの不必要でしょ」

どうしてやう決め付けるのか。

母はとにかく俺を縛つた。

いまで突き放していくくせに、なぜいまになつてこんなにも縛るのだろう。

俺を偉くしてなにか得があるのだろうか。

(…学校でもあの人のこと考えるのやめよ)

どんどん鬱になつてゆくから。

そんなことより、俺がもつと氣にしてるのは昔の友人のことだ。

なんとなく、予感がするんだ。

『もしかしたら、

突然、母親の声が頭で響いた。

期待なんかしないで頂戴。あなたは何も出来ないんだから、運なんかに期待しないで。

そつやつて、また出てくる。

どんなに俺を縛れば気が済むんだ。

俺だって予感や運にたよったって、いいだろ。

(くそ…)

どんどん自信をなくしていく。

『あなたは駄目だけど、勉強すれば自信なんですがくわよ

アンタはそういうんだけど、

勉強したって、自信なんかつかない。  
誰かにこう、言つてほしい。

自信なんていらない、と。

でも俺にはもう、そういうてくれる人はいない。

next

由比が珍しく2・D組（増岡のクラス）に坐ってきた。  
よお、片手を挙げて軽く挨拶をする。

「あのわ」  
「うん？」  
「どうちからこべの」

由比はいつも説明もなしに話を始める。

「なんだ、突然」

増岡の返答に由比は眉間にしわを寄せた。  
(そんな変な顔せんでも)

「孝と恵。勧誘」  
ああ、いつてたつけ、そんなこと。  
増岡はパンを一口かじり、考えた。  
(どっちから、つていわれても。顔覚えてないし。リリーストキター  
に答えるか)

「孝、でいいよ」  
「ん。じゃあ、昼食たべたら、行こう」

(加藤由比、今日も積極的にしゃべる、行動する)

昨日から感じていることだ。

由比は自分に出来つてからとこつもの、明るくなつたよつな気がす  
る。

ふと、先生のいった言葉を思い出す。

「ひかりになつてあげて、ね？」

(なれてるのか、光)

そう考へると、やけに恥ずかしい。

自分は由比に必要な存在になれてるのか。

「食べろよ」

「…はい」

昼食をすませた増岡と由比（正確に言つて食べていたのは増岡だけだが）は孝探しを決行した。

「孝つて何組なんだろ」

「…ああ。聞いてみればいいよ」

何だ、その言い方。

聞けど？

数秒間増岡は加藤を睨み続けていたがその視線に気づいた加藤がにらみ返してきたので目線を加藤からはずした。（ええ、こわかつたですよ。悪いですか）

しかたない、加藤の言つとおり、聞いてみるか。

とりあえず近くにいた少年（同じ年だけ）に問い合わせてみた。

「長谷川孝つて何組か知つてる？」

「長谷川？長谷川なら…確か2年A組じゃない？」

適当に選んだ人間だったが、知つてよかつた。

「ありがとう、見知らぬ人」

加藤は言わなくてもいい単語を発した。

見知らぬ人はいらんだろ。

まあ、そんなことはさておき。

とりあえず俺たちは2年A組へと向かった。

2年A組についた。

どうやって探す?と加藤に問いかける。

「俺は、顔知ってるからわかるよ」

加藤は増岡の学ランのすそを引っ張つた。

ああ、そのままはいれど。

異様だよな。

こんな二人が普通にはいっていくと。

少し恥ずかしかつたが、加藤が落ち着くのならまあいいか。

「失礼します」

教室の扉を開けると、一瞬にして周りが静かになつた。

(…エ、何?)

ほんの少しの沈黙が続いたが、そんな沈黙はすぐに消えた。一人の少年が叫ぶ。

「ま、増岡が女連れてる…!」

(ああ、伊藤じゃないか。1年生のとき一緒にクラスだった。ン、待て。

女連れてる?)

ちらりと横を見た。

そこには顔だけが美少女、な大変中途半端な女がいた。

「ち、ちがーうつー」こいつはあ…

「つねーつー増岡君、彼女できたのーお?ー」

ショックーとかいう女子の声が聞こえた。

ありかど二  
なんていってる場合じゃなし

周りからヤーをやーと騒いでゐるに目もくれず、由比はすうと、とある男子を指差した。

「孝」

人を指差しちゃいけません。

「ああ、あれ？」

۱۰۱

加藤はぐいぐいと増岡の学ランの裾をひつぱりている。  
増岡ははあ、とため息をついて、短くおう、とだけ答えた。

「長谷川孝君、だよね？」  
ちょっと署まで来てもらおうか、みたいな感じで聞いてみた。  
別にふざけでいってるわけじゃない。ほんとにそんな感じで聞いた  
んだ。

その声に反応して、孝が軽く上を向いた。

「「「！」んこじわわ」」

そのときの孝の反応は大変おかしかった。

目を大きく見開き、頬を軽く赤くし、増岡と加藤をじっと見つめていた。

(え、何の反応)

孝はすぐに下を向いて、小さこ細でつぶやいた。

「…何」

(ああー。やっぱーぞ。交渉不成立かも)  
ほんのすこしう沈黙が続いたと思ったたら、加藤が孝の顔をはさんで上

に向かせていた。

そして一言。

「人と話すときは田え見て話せ」

(お前が言えることかよ)

「なな、な、んつだよー」

顔を真っ赤にしてまた孝はうつむいた。

「俺たちとバンド組むも」

直球。

とまどいとかほんと、こいつはないの。

孝はまた手を丸くして加藤を見つめていた。

「な、」

「組も「う」

「なんでだよ？」

「やりたいから」

（やつぱ、やなのかな）

半場あきらめた。

どうせこのまま聞き続けてもおんなじ答えが返ってくると思ったから。

（由比もあきらめればいいのに）

じつと加藤と孝の言い合いを見つめた。

だが、加藤はあきらめる様子が一切感じられなかつた。

（…意地でも入れる気だ）

加藤は孝の手をとつてぐつと握つた。

「なつ、」

「組も「う」

加藤はじつと孝を見つめていた。

すると、孝は加藤の手を振り払つた。

「し、しつこいんだよ！なんだよ、そんなの入つたって、なんか変わるもの？！救われるわけ？！」

孝は言い終わつてから口をつぐんだ。しまつた、そう言ひたげな顔だつた。

増岡は孝の発した言葉が気になつた。（救われる、つて？）

何かを抱え込んでるのだろうか。  
救われたいのだろうか。

「もしかしたら」

加藤が口を開いた。

「もしかしたら。なんか変わるかもしね。もしかしたら、救われるかもしない。そう思って、俺も今こうやってバンドやるうとしてるんだ。だから、孝もやってみようよ。なんも、何も自然に変わらなかつたら」

加藤がもう一度孝の手を握った。

「俺が、無理やりにでも変えて見せるよ。無理やりにでも、救つてみせるよ」

加藤は本気だつた。

(俺、なんか変えるとか考えてなかつたんだけど。もしかしたら、)

『君が、光になつてあげてね?』

(もしかしたら、光に変われるかもしね)

最初は軽はずみで始まつた、俺の口が滑つて始まつたことだけど。

(すいこことになりそつだ)

「…」

孝はまた、顔をしたにむけた。  
だが、次はつぶやかず、大きな声で

「組むよ」

と発した。

next

## キズアト？（前書き）

110日更新しなかったのは新キャラ君のキャラがなかなかつかめないからです

## キズアト?

放課後、加藤と増岡が孝のクラスに足を運んだ。

「やつほーう。孝くん」

「…げ、何?」

孝は顔を顰めながら増岡を睨んだ。

「睨まなくていいでしょーつ。せつかへ今日の部活にお誘いしようと思ったのに」

「はつ? 部活、で…?」

「バンド組もうって言つたでしょ?」

「…部活だったのかよ」

そんなこと少しも聞いてない。  
孝は小さくため息をついた。

「部活だよー」

「ハニーハニとした笑顔がやけに鼻につく。  
どうしてそんなに笑顔なんだ?」

「増岡機嫌よやすぎ」

突然後ろから声がした。

振り返るとそこには加藤がいた。

(…こつのもん)

加藤は気配なく現れる（様な気がする）

「加藤、気配もなく現れるなよ」

増岡もそう思つていたよつだ。

「失礼だ」

加藤の手が増岡の頭部を殴る。

それでも何事もなかつたよつて増岡は孝と会話を始めよつとする。

「まあ、こんなところで立ち話もなんですから。部屋でも行きましょうか」

近所のおばさんかなんか。

この一人にはツツコみといづものがいるのかもしれない。

そんなことを考えていると、増岡の手が自分の腕をつかんでくるのがわかつた。

ハツとする。

腕をつかまれることにはトラウマになつていた。

ソレが母の暴力の合図だったから。

震えたくないのに体が勝手に震える。

（落ち着け、コレはあの人なんかじゃない）

そつ思つていても体の震えは止まらない。

「孝？」

震えはせりて止まらなくなつた。

声は増岀だが、脳内で勝手に母の声に変換される。

『孝ツ……』

やめてくれ。

『本当に駄目な子！本当にツ…！…あんたもあの人と一緒に…！…私を侮辱してツ…！』

本当に。

やんてくれ、頼むから。

嫌なことしか思い出せない。

増岡が握っていた手を離したのがわかった。

それでも震えは止まらない。

（やっぱり、駄目なんだ。どこにいたってあの人を恐れることは変わらない）

バンドなんか組んだって、あの人は許してくれない。

「や、っぱ俺…」

バンドなんか組まない。

そういうおうとした。

そのとき。

す、と自分の腕に何かが触れた。  
由比の手だった。

（え、）

ただ、それだけ。

それだけのことだったのだが、なぜかものすごく救われた気がした。  
震えが止まつたから。

「大丈夫？」

「…あ、ああ…」

その光景を見ている増岡はぽかんと口を開けていた。

「えーえー…。大丈夫う？」

そういうつて増岡は孝の肩をつかむ。

「おー…」

(一気に疲れた)

「今日はやめといつ」

そういうつて由比は孝の手を握り歩き出をうとしていた。

「んなつ…?」

突然握られた右手に孝は動揺を隠せず叫んでしまった。

「帰ろうか」

「そ、その前に手を離せよつ」

「具合悪そだつたからさ」

こいつの行動にはついていけない。

気づくと逆の手にも暖かさを感じた。

増岡までもが左手を握っていたのだ。

「ちよ、おい！」  
「帰ろつかー！」

両手に感じる手の暖かさに、なんだかもつ反論する気がつかない。

(こんななんだれかが見たら変に感じるだらうな)

日常に少しは変化あり。

next

## 母親

「入部届け、つて親の判とかいるんだよな?」

ふと気づいたことを加藤に聞いてみる。

加藤は目を大きく見開き「そうだよ」と答えた。

それを聞いた孝は

「だ、よなあ…」

「? 何

「…別に

入部やらなにやら、すべてにおいて親の同意が必要なのはわかっている。

同意してくれなければ何も出来ないような世間である。

(同意なんてしてくれるわけない)

はあ、とひとつため息を吐いた。

家に着くと母親がテーブルに座っていた。

「…あら、お帰り

まるで帰つてくるのが分かつていたようなタイミングだった。  
そんな母親の行動に少し吐き気がする。

「ただいま

母親の香水のにおいがつんと鼻につく。

気持ちが悪い。

血のつながつてこる母親なのに本氣でそう思つてしまつた。

「プリントとかないの? 出しなさい」

「うううとこりは母親らしき。」

鞄を探つてプリント類を差し出す。

母親はそれを受け取るとバラバラと読み流した。

「…なに、これ?」

母親の手が一枚のプリントによつて止められた。  
入部届けだった。

「それ、は」

一瞬、誤魔化そうとした。

都合が悪くなつたときに出る自分の癖だ。

正直に言わないといけないことなのに。

だが、『部活に入りたいんだ』

こんなことを言つたら、きっとまた罵られるだらう。  
でも、もう加藤たちと約束してしまつたことだ。

いつまでも黙つたままではいられない。

「部活に、入りたいんだ」

ぐ、と拳を握り締める。

何を言われるのか、覚悟した。

「…何を、言つてゐるの」

「ほひ、やつぱり。

「貴方までやつやつて私の言つことを見かない氣なの?」

「あの人と一緒にだわ」

「頭しかいといひがないのに。そんな」とやつてゐる余裕あるのか  
しつゝ。

「部活なんてしたつてこことなこでしょ」

「うわ」とのよひに止き続ける母親の目をずっと見つめた。  
もつねれた。

同じことの繰り返しだ。

今はもう殴られることはなくなつたが、延々と罵られ続ける。

(つづ)

自然と、母親を睨みつけた。

「…なんなの、その顔」

はつとした。

こんな行動、母親を怒らせるだけなのに。  
母親の目から視線をそらす。  
(久しぶりに怒らせた)

「ふざけないでちょうどいい…。中学生に入つてから少しほとんどなくなつたと思ったのに」

母親の右手が強く頬をたたいた。  
その衝動で床に倒れこんでしまう。

(…久しぶりに、やられるかも)

腹の部分に強く蹴りが入る。

「うぐ…」

上品そうな母からは考えられない蹴り。

情けない。

自分より背が低い、女性に蹴りを入れられ抵抗もしない。  
(こまなら抵抗できるはずなのに)

母はまだ蹴りをやめてはくれない。

足、背中、また腹。

次々と蹴りがくわえられていく。

(昨日今日といい日だったから)

痛さからではない、涙がこぼれた。

(いい日なんて毎日続かないんだ)

わかってた。

わかつてたわかつてたわかつてた。

父親のときもそうだったのに。

あのとき、毎日幸福だったのに。

父親がいて、自分と毎日のように遊んでくれる毎日。

それが突然ぱつりと切れて。  
わかったのに。

幸福は続くものではない。  
毎日続く幸福なんてない。

母親の足が目の前にあった。

ぎゅ、と皿をつぶった。

どさり、と物が落ちた音がした。

通学用の鞄だった。

母親の動きが止まる。

音がしたぼうに顔を向ける。

「…あのー。ピンポン押しても来ないのに鍵開いてたから

そこにたっていたのは、加藤由比だった。

こんな状態の母親と俺の姿を見て見事に無表情だった。

「あー、えー、うん、つと」

加藤が何かを説明しようと手を動かしている。

母親は驚きすぎて声もでないみたいだ。

俺はとこりと腹を蹴られて動けない。

ふと、加藤と目が合った。  
ぱっと皿をやらいす。

その瞬間、体がふと立ち上がった。

「…え、」

加藤が俺を背負っていた。

「え、えええ？」

俺と加藤の身長差はかなりある。  
だからそれなりに体重差もあるだらうし、こいつは俺のことを軽々と持ち上げた。

「あの、お取り込み中のといふ悪いのですが、こいつ引き取らせて  
いただきます」

母親に向かつてそう言い放った。

「え、え、なに」

「走るよ?捕まつて」

俺を背負つた加藤は玄関のドアまで猛ダッシュをした。

ドアは元から開かれていたらしく、すんなり家から脱出できた。

(ドンだけ体力あんの、こいつ) 体重差も身長差もある自分を背負つて走れる加藤が本当にすげーことおもった。

「よいしょ、つと」

加藤は孝をとある家の前でおろした。

「お、まえどんだけすいこんだよ」

「ナニが?」

「よく、俺の」と背負つて走れたな

「ああ、軽かつたし」

『軽かつた』

そんなわけがない。  
常識はずれの体力だ。

ふと、加藤の足に目が行く。

「え」

驚くことに、加藤は一ソックスのまま走っていたのだ。

「おま、靴は」

「ああ。ここ」

そういうながら田の前にある家を指差す。  
表札には「加藤」と記されていた。

「…お前の家?」

「そ」

加藤が鍵を開ける。

「入つて  
ぐいっと孝の腕をひっぱる。

「な、なに？」  
「手当で、しないと」

とんとん、と自分の頬をたたき表現する加藤。  
そしてぱたぱたと走つて他の部屋に入つていった。

(…おどりこた)

まだ心臓がなつているのが分かる。  
その下をさわり、先ほど蹴りを食らつた腹をなでる。  
鈍い痛みがじわりと襲つてきた。

(まさか、加藤が来るとは)

さつきの光景がフラッシュバックする。  
といつても加藤の登場してきた場面だけだ。  
すこかつた。

只それだけしか言えない。

(うれしかつた、な)

「孝」

びくつと体が震えた。  
「学ラン脱いで」

といいつつ加藤はボタンを外していた。  
矛盾してゐる。

学ランのボタンを外されたあと、Yシャツのボタンも外される。

「ちょ、おまえ…」

「何」

なんのためらいもなく外すものだからもうびりびりもよくなつた。

「どうやって治療すればいいんだ？」お腹

「…湿布はりやいんじやね」

「ああ、そつか」

そうひつて救急箱から湿布を取り出し孝の腹に貼る。

「…わんきゅ」

「いーえ」

学ランを着なおし、とりあえず一息つく。

「…この家、誰もいねーの？」

「俺とお前がいるだろ」

「俺ら以外に、だよ」

ああ、と手をぽんとたたいて漫画みたいな表現をする。  
天然なのか、なんなのか。

「いないよ？」

「親は？」

「親二人海外で仕事してるの。いつもはお手伝いさんが來てるんだ

けどまだ来れない

お手伝いさん。

そんなのを雇つてる人初めてみた。

テレビや小説などでよく見るけど、實際見たことない。

「…す、ごいな」

「俺料理も掃除も出来ないから」

ああ、なんかそんな感じ。

と言おうとしたが怒られそうだったからやめた。

「あのヤバ」

孝がぼーっと家中を見ていたら突然加藤が口を出した。

「話くんない? セッキの」

急に加藤の顔が真剣になる。

ああ、やつぱり、はなないとだめか

next

## むかしばなし。

昔。

そんなに昔ではないけど、約5年前。

俺は3人家族だった。

俺と、母と、そして父。

母と俺は昔から仲が悪かった。

俺と母の間に父が入つていって、やつと「家族」でいれた。

父はやさしかった。

休日には俺と遊んでくれたし、平日にはいつも俺が学校から帰つてくれるのを待つてくれていた。

父は無職だった。

それに気づいたのは真夜中、目が覚めたとき、母が父に離婚を申し付けたときだった。

『あなたのsuchな負け犬と、何で結婚したのかしら。昔はちゃんと職に就けてたのに…。出てつて頂戴。孝まであなたみたいにしたくないわ』

次の日、父の物と一緒に父はいなくなっていた。  
俺を残して。

『お前なんて嫌いだ！……！』  
母に叫んだ言葉だった。  
後悔なんてしなかった。

『母親になんてこと言ひのー。』

ぶたれた。

普通の親がするよつた行為ではなく、暴力。  
ぶつだけでなく、蹴つたり、煙草をおしつけたり。

いわゆる、虐待。

小学校の頃はほとんどの毎日。

でも中学にあがつてぱつたりやんだ。

俺の勉強の成績を見てやめたんだとおもへ。

「つとこじまでで質問は？」

なんてちょっと冗談を言つてみた。

「…」

加藤は黙り込んだ。

本当は誰にも話す気はなかつたんだ。  
でも、加藤にはなしたかった。

俺の過去、俺の思い。

「なんでやめたの」

やつと加藤が口を開いた。

「なにを？」

「…暴力」

極力小さな声で加藤は言った。  
結構優しいんだな。

なんて思った。

「んーとなあ。多分、優越感?」

「…ゆーえつかん」

「うん。自分の子供はこんなことできしなるのよーつてこりゃ」

「…孝、なんか、キャラ違つよ」

加藤の手が俺の手を握った。

その手を握り返してやる。

人の手を握つたり握られたりするのはどれくらい久しぶりなんだろ  
う。

安心するもんだなあ。

「今日は、うちで、とまつなよ

「うえつ?」

いや、それはまずいんじやないかい?  
だつていちおう、ふたりつきりになるのでは。  
言わつとかむかど瓶が出なー。

「あ、う、」

「いいの、泊まつて行つて。家に帰すわけには行かないもん。また  
ぶたれたらどうするの」

至近距離で顔を見つめられて照れる。  
こんなに整つた顔をしてたんだ。

「…じゃ、あ泊めてくれ」

「うそ」

ここつとこると、妙に落ち着くんだ。

next

## むかしばなじ。（後書き）

作者名を変えました。

加藤由良、改めまして伊東ゆさです。

友人に「主人公とお前の名前にてねえ？：もしかして加藤由比つて  
モデルおまえ？美少女つてｗｗｗｗちよｗｗｗくはｗｗｗｗ」と笑  
われました。

えーっと、友人よ、違います。  
ただ名前がにているだけです。

そういうわれるのが嫌になったので作者名変更です。

よろしくお願ひします

伊東ゆさ

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1755d/>

---

スタ バン

2010年10月9日12時37分発行